資料紹介

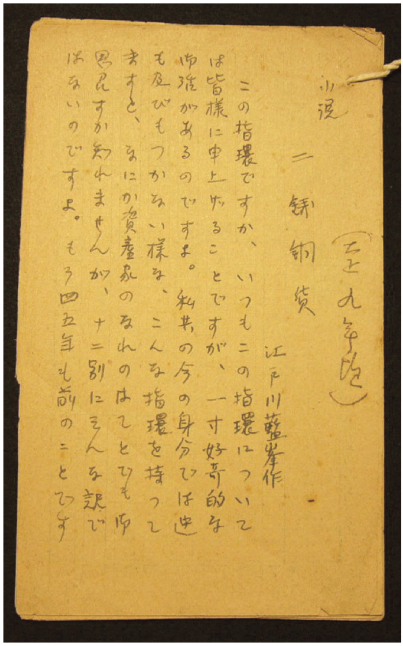
二銭銅貨

落合教幸
藤井淑禎

江戸川乱歩は団子坂で古本屋を営んでいた時期があり、小説「二銭銅貨」はその頃に構想された。大正九年、数え年で二十七の頃である。古本屋の経営はおもわしくなかったので、「智的小説刊行会」という組織を立ち上げて、雑誌を発行することを企画していた。乱歩が作成したスクラップブック「貼雑年譜」にはその際の雑誌見本が貼り付けてある。「グロテスク」初号予告「石塊の秘密（約百枚）江戸川藍峯作」とあり、これは後に「一枚の切符」となるべきものである。同じ時期の資料は「EXTRAORDINERY」と書かれた封筒にまとめられており、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター「センター通信」創刊号で紹介した「秘密小説二銭銅貨荒筋」などがある。

この「二銭銅貨」草稿は電報頼信紙の裏に書かれている。大正九年に書かれたものであることは冒頭のメモでわかるが、一四枚で途絶した状態である。この構想をもとにして、大正十一年に「二銭銅貨」はあらためて執筆される。貼雑年譜には「大正十一年九月二十六日カラ数日ノ間ニ、「二銭銅貨」ヲ大正五年ノ日記帳ノ余白ニ下書キシ、又「一枚ノ切符」ハ大正十一年ノ日記帳ノ余白ニ、九月二十一日カラ二十三日マデカ、ツテ下書キシタ。」とある。筆名が「乱歩」となったのはこの時からである。この二篇は一度馬場孤蝶に送られた後、博文館の森下雨村に送られ、乱歩のデビュー作として「新青年」大正十二年四月号に掲載されることになる。

発表された「二銭銅貨」は、「私」と「松村」という下宿人が、銅貨の暗号と紳士泥棒の隠した大金をめぐって交わす会話を中心とした小説である。荒筋・草稿の段階ではまだそのような枠組みは採用されておらず、夫と妻の会話になっている。この草稿は小説の冒頭部分のみで、「荒筋」にはさらに、紳士泥棒の記述や二銭銅貨に隠された点字の暗号まで書かれている。しかしそれ以外の部分は大正十一年の作と考えられる。（落合教幸）



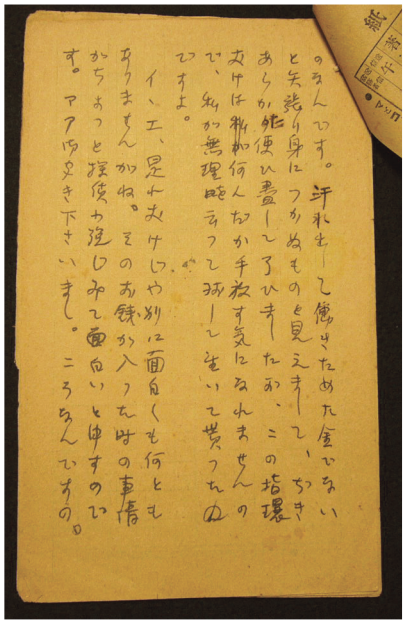
小説

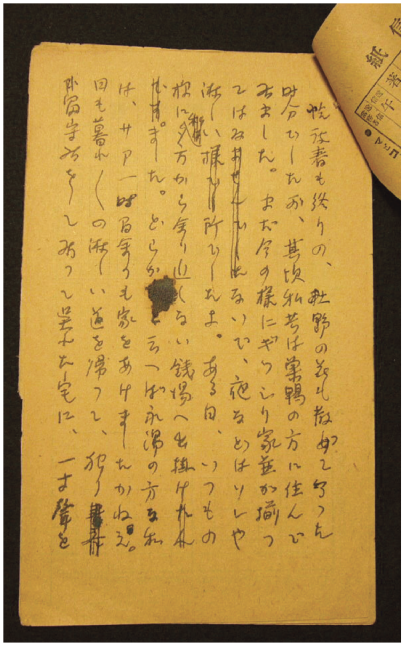
二銭銅貨

（大正九年頃）

江戸川藍峯　作

この指環ですか、いつもこの指環については皆様に申上げることですが、一寸好奇的な御話があるのですよ。私共の今の身分では迚も及びもつかない様な、こんな指環をもってますと、なにか資産家のなれのはてとでも御思召すか知れませんが、ナニ別にそんな訳ではないのですよ。もう四五年も前のことですが、あることから不意に少し纏ったお銭が入ったものですから、んですの、何しろその頃は、まだ宅も駈け出しの貧乏画描きだったものですから、サア嬉しくってたまりません。急に家を引越すやら、柄にもない御召物を注文するやら、●宅は宅でプラチナの時計だ、ダイヤモンドのタイピンだと騒ぎますし、私は私で亦、髪飾りやら、指環やら、出来る丈けの贅を盡して、その當坐と申すものは、毎日々々二人連れで盛り場〳〵を練り歩いたものなんです。汗水出して働きためた金でないと矢張り身につかぬものと見えまして、ぢきあらかた使ひ盡して了ひましたが、この指環丈けは私が何んだか手放す気になれませんので、私が無理を云って残して置いて貰ったのですよ。





イ、エ、是れ丈けじや別に面白くも何ともありませんがね。そのお銭が入った時の事情がちょっと探偵小説じみて面白いと申すのです。マア御聞き下さいまし。こうなんですの。

恰度春も終りの、上野の花も散って了った時分でしたが、其頃私共は巣鴨の方に住んで居ました。まだ今の様にギッシリ家並が揃ってはゐませんでしたないで、夜などはソレや淋しい様でし所でしたよ。ある日、いつもの様に私は夕方から余り近くない銭湯へ出掛けたんです。ました。どらかと云へば永湯の方な私は、サア一時間余りも家をあけましたかねえ。日も暮れ〳〵の淋しい道を帰って、独り書斎で留守居をして居って呉れた宅に、一寸聲を掛けやうと書斎の襖唐紙を開けゐたますと、イキナリ宅の大変亢奮した様な顔にブッつかったのですよ。

『オイ、お前か、こ、へ二銭銅貨を置いたのは』

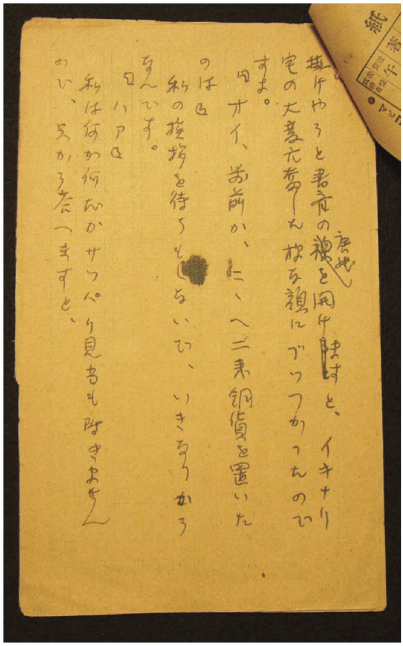
私の挨拶を待ちもしないで、いきなりかうなんです。

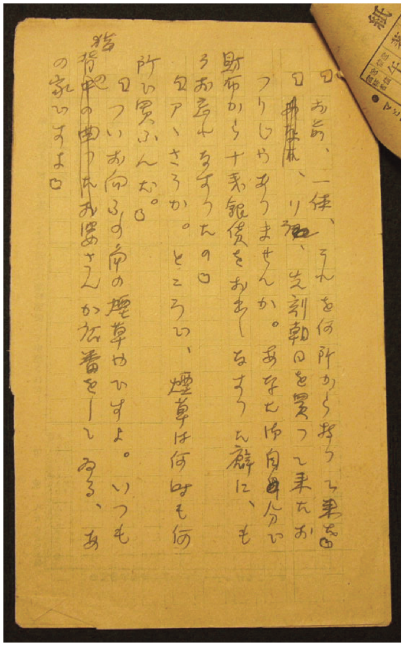
『ハア』

私は何か何だかサッパリ見当も附きませんので、只かう答へますと、

『お前、一体、それを何所から持って来た』

『あなた──ソラ、先刻朝日を買って来たおつりじやあり





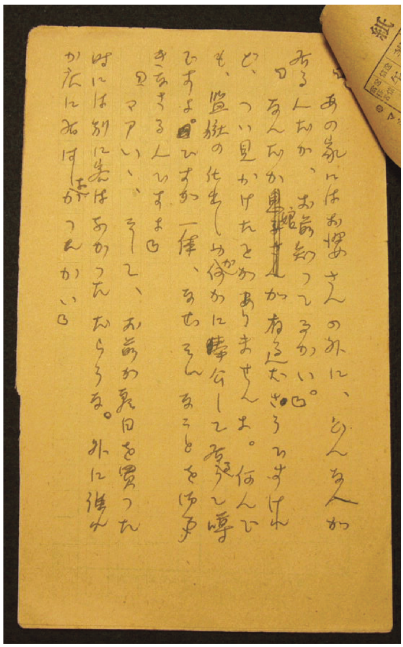
ませんか。あなた御自身分で財布から十銭銀貨をお出しなすった癖に、もうお忘れなすったの』

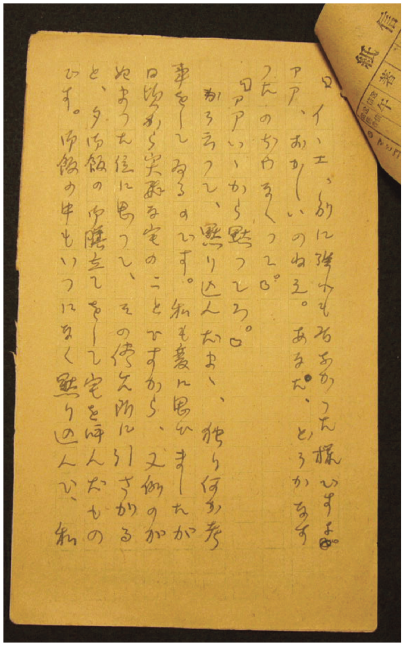
『ア、さうか。ところで、煙草は何時も何所で買ふんだ。』

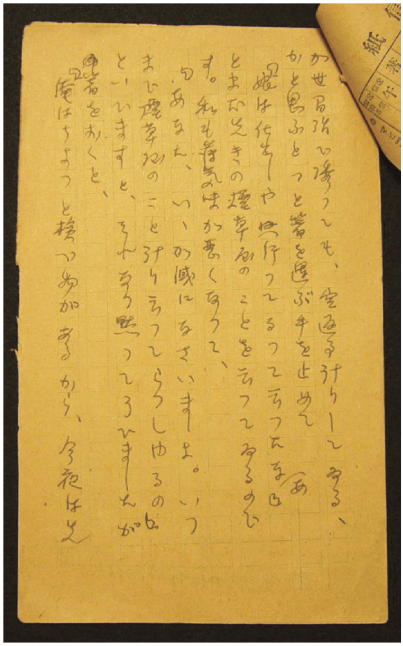
『ついお向ふの角の煙草やですよ。いつも猫背の中の曲がつたお婆さんが店番をしてゐる、あの家ですよ』

『あの家にはお婆さんの外に、どんな人が居るんだか、お前知ってるかい。』

『なんだか娘息子さんが有るんださうですけれど、つい見かけたことがありませんよ。何んでも、監獄の仕出しか何かに奉公して居るって噂ですよ。ですが一体、なぜそ







んなことを御聞きなさるんですよ』

『マアい、、そして、お前が朝日を買つた時には別に客はなかつただらうな。外に誰れか店に居はしなかつたかい』

『イ、エ、別に誰れも居なかつた様ですよ。マア、おかしいのねえ。あなた、どうかなすつたのぢやなくつて。』

『マアい、から黙つてろ。』

かう云つて、黙り込んだま、、独り何か考事をしてゐるのです。私も変に思ひましたが日頃から突飛な宅のことですから、又例のが始まつた位に思つて、その儘台所に引さがると、夕御飯の御膳立てをして宅を呼んだものです。御飯の中もいつになく黙り込んで、私が世間話で誘つても、空返事計りして　ゐる、かと思ふと　つと箸を運ぶ手を止めて

『娘は仕出しやへ行つてるつて云つたなあ』

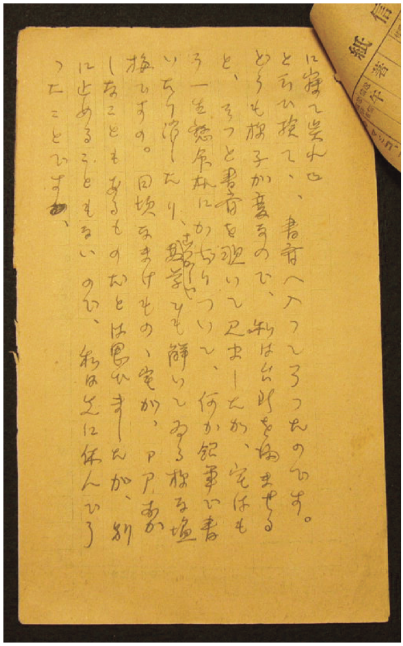
とまだ先きの煙草屋のことを云つてゐるのです。私も薄気味が悪くなつて、

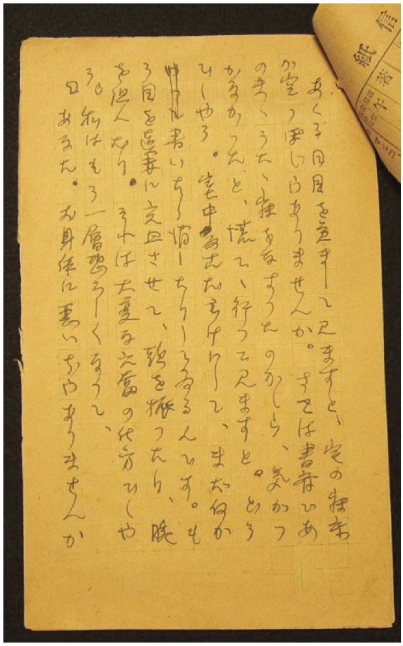
『あなた、い、加減になさいましよ。いつまで煙草屋のこと計り云つてらつしやるの』

といひますと、それなり黙つて了ひましたが箸をおくと、

『俺はちよつと検べ物があるから、今夜は先に寝て呉れ』

と云ひ捨て、、書斎へ入つて了つたのです。





どうも様子が変なので、私は台所を済ませると、そつと書斎を覗いて見ましたが、宅はもう一生懸命机にかぢりついて、何か鉛筆で書いたり消したり、むつかしい数学でも解いてゐる様な塩梅ですの。日頃なまけもの、宅が、マアおかしなこともあるものだとは思ひましたが、別に止めることもないので、私は先に休んで了つたことです、

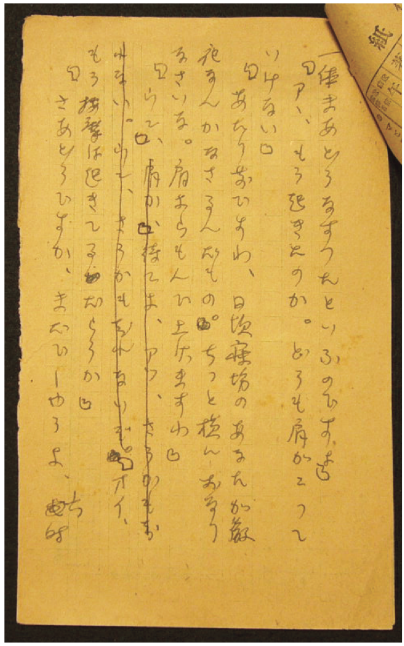
あくる日目を覚まして見ますと、宅の寝床か空つぽじやありませんか。さては書斎であのまゝうたゝ寝をなすつたのかしら、気がつかなかつたと、慌てゝ、行つて見ますと。どうでしやう。室中反古だらけにして、まだ何かやつて書いたり消したりしてゐるんです。もう目を眞赤に充血させて、頸を振つたり、腕を組んだり。それは大変な亢奮の仕方でしやう。私はもう一層恐ろしくなつて、

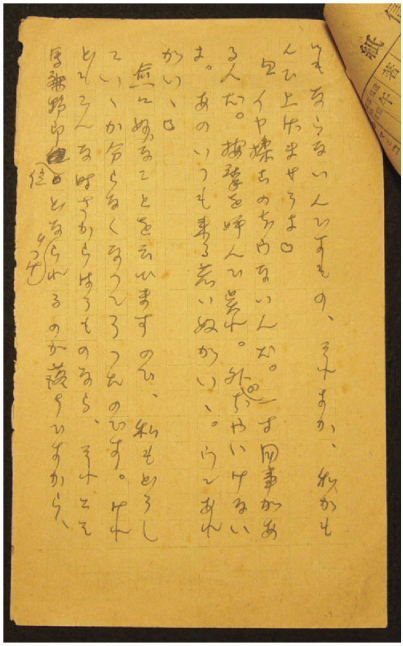
『あなた。お身体に悪いぢやありませんか一体まあどうなすつたといふのですよ』

『ア、、もう起きたのか。どうも肩がこつていけない』

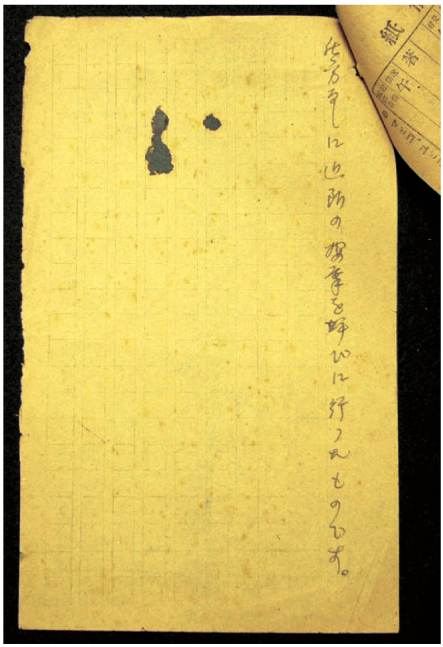
『あたり前ですわ、日頃寝坊のあなたが徹夜なんかなさるんだもの。ちつと横におなりなさいな。肩ならもんで上げますわ』

『ウン』肩か、待てよ、アツ、さうかも知れない。ウン、さうかも知れないぞ『オイ、もう按摩は起きてるだらうか』





『さあどうですか、まだでしやうよ、六時にもならないんですもの、それよか、私かもんで上げませうよ』

『イヤ揉むのぢやないんだ。一寸用事があるんだ。按摩を呼んで呉れ。外のぢやいけないよ。あのいつも来る若い奴がい、。ウンあれがい、』

急に妙なことを云ひますので、私もどうしてい、か分らなくなつて了つたのです。けれどもこんな時さからはうものなら、それこそ馬鹿野郎位どなりつけられるのが落ちですから、仕方なしに近所の按摩を呼びに行つたものです。